

DX0.4 User Guide

Loudspeaker management system



Copyright © 2024 Martin Audio Limited

Publication date 2024-05-14

安全上のご注意

- 本取扱説明書をよくお読みになり、大切に保管してください。
- すべての警告に注意し、指示に従ってください。
- 本機を雨や湿気に近づけないでください。
- 本機を熱源から遠ざけてください。
- キャンドルや炎に近づけないでください。
- 換気口を塞がないでください。
- Martin Audioの指示に従って設置してください。
- 電源ケーブルのプラグから保護アースを取り外さないでください。本機は必ず接地してください。
- 電源プラグの近くを歩いたり、傷つけたりしないでください。
- 落雷時や長期間使用しないときは、電源プラグを抜いてください。
- 本機を開けないでください。感電の危険があり、修理可能な部品はありません。
- 修理が必要な場合は、有資格のサービス技術者に依頼してください。
- 本機の寿命が尽きましたら、リサイクルセンターをご利用ください。

目次

イントロダクション	5
特徴.....	5
はじめに.....	6
デスクトップ app	6
プロセッサとPCの接続.....	6
フロントパネルを使ったセットアップ.....	7
システム接続.....	7
記憶.....	7
フロントパネル.....	8
バックパネル.....	9
ユーティリティーメニュー.....	10
ユーティリティーメニューの使用.....	10
ユーティリティーメニューの選択.....	10
システムユーティリティー.....	11
インプットソース.....	11
シグナルジェネレーター.....	11
リンクインプット	12
リンクアウトプット.....	12
リンクチャンネルモード.....	12
呼び出しモード.....	13
工場出荷時設定.....	13
出力のクリッピングを防ぐには.....	13
出力VUメーター	14
ファームウェアバージョン	14
プログラムユーティリティー.....	16
プログラムの呼び出し	16
プログラムの保存.....	16
ネットワークユーティリティー.....	17
RS-485 ID	17
デバイスネーム.....	17
IPアドレス.....	17
サブネットマスク.....	18
ゲートウェイ.....	18
LANモード	18
セキュリティユーティリティー.....	20
アドミン・エキスパートとしてのログイン	20
ログアウト.....	20
入力チャンネル.....	21
入力チャンネルの編集.....	21
入力チャンネルメニュー.....	21
入力名	21
入力ノイズゲート.....	22
入力ゲイン.....	22
入力ポーラリティ	22

入力ディレイ	23
入力EQの有効か	23
10バンド入力EQ	23
出力チャンネル	25
出力チャンネルの編集	25
出力チャンネルメニュー	25
出力名	25
チャンネルの工場出荷時へのリセット	26
出力ソース	26
出力ゲイン	26
出力ポーラリティ	27
出力ディレイ	27
ピークリミッター	27
プログラムリミッター	27
出力FIRを有効にする	28
ハイパスフィルター	28
ローパスフィルター	28
出力フィルターを有効にする	29
8バンド出力EQ	29
システム例	30
BlacklineX12 and X118 subs	30
O-Line arrays and SX112 subs	30
Two pairs of LE200 monitors	31
CDD12, CDD6 and SX212 subs	31
THV and SX118 subs	32
BlacklineX12 and SCX115 subs	32
トラブルシューティング	34
電源が入らない	34
ノイズ・ハムノイズ	34
音が出ない	34
片方の音量が大きい	34
音が悪い	34
技術仕様	35

イントロダクション

DX0.4は、極めて低いノイズ・フロア、高いダイナミック・レンジ、強力な内蔵DSPを備えたデジタル・オーディオ・プロセッサです。会議室、小劇場、クラブなどで優れたパフォーマンスを発揮します。

DX0.4は、強力なカスタム・デジタル信号処理と独自のDSPアルゴリズムを採用しています。DSPとAD/DAは96KHzのサンプリングレートで動作します。DX0.4は以下を提供します。

DX0.4は、あらゆるラウドスピーカー・システムのための完全なプロセッシングとクロスオーバー・ソリューションを提供します。このシリーズには、4出力のDX0.4と6出力のDX0.6の2モデルがあります。この2つのモデルの違いは出力数だけです。

入力ゲイン、ディレイ、ノイズゲート、EQ、ルーティングから出力ゲイン、ディレイ、極性、クロスオーバー、EQ、プログラム、ピーク・リミッターまで、包括的なシグナル・チェーンを備えています。パラメトリック・イコライザー(PEQ)は14種類と豊富です。出力クロスオーバー・フィルターには、クラシックなリンクウィッツ・ライリー、ベッセル、バターワース・フィルター・スタイルがあり、スロープは6dB/オクターブから48dB/オクターブまであります。

新しく設計されたリミッター・セクションは、スピーカーに長期間かかるパワーを制限するために、遅い時定数で最大レベルを維持します。

スピーカーへの長期的なパワーを制限します。これにより、破損の可能性を低減するとともに、あらゆるプログラム素材に不可欠な要素である短時間のピークを許容します。2つ目のリミッターは、短期的なピークをスピーカーにとって安全なレベルに制限することで、サウンドシステムを問題なく動作させるための最善のソリューションを提供します。

各出力には、最大512タップのFIRフィルターをインポートするオプションがあります。スピーカーのプリセットに使用することで、位相特性を改善し、要件に応じて指向性を制御することができます。

特徴

- 幅広いシステム・アプリケーションに対応する2入力4出力のプロフェッショナル・システム・プロセッサ。
- ・EQ、ゲート、ディレイ、リミッターを含む包括的で洗練されたプロセッシング・オプションにより、システムの最適化と保護が可能。
- 各ルーティング・ノードには減衰オプション付き。
- 最大12dBのゲイン、極性反転、600msのディレイ、10バンドのパラメトリックEQ(各バンドごとに14種類のフィルタータイプを選択可能)。

- 4系統のインピーダンス・バランスXLR出力(ゲイン12dB、極性反転、200msディレイ、カットオフ・スロープ-6dB/oct~-48dB/octのハイパス/ローパス・フィルター)。
- 48dB/octのカットオフ・スロープのハイパス、ローパス・フィルター。
- Rileyフィルター。8バンド・パラメトリックEQ、14種類のフィルター・タイプ、独立したプログラム・リミッターとピーク・リミッター。
- 便利なフロント・パネル・コントロールとLCDディスプレイで設定や変更が可能。全入出力にワンプッシュのミュートボタンを装備。
- フロントパネルにUSBポートを装備。
- EthernetまたはRS485によるネットワーク接続が可能。
- 出力チャンネル・プリセットのインポート機能により、Martin Audio ラウドスピーカー用の出力チャンネル・プリセットのライブラリを素早く簡単にインポート可能。
- 入力、出力レベル、リミッター動作の6セグメントLEDメーター。
- システム・コンフィギュレーションを保存する32のユーザ・プリセット機能。
- パスワード保護機能付き3段階カスタマイズ可能なユーザーモード
- 90~240V、50/60Hzに対応するユニバーサル・スイッチ・モード電源ユニット。
- コンパクトな1ラックユニット設計
- 概算出荷重量:3.5kg

はじめに

DX0.4のセットアップには2つの方法があります。:

- DX0.4に接続されたコンピュータ上で動作するデスクトップアプリを使用する。すべての設定にアクセスでき、通常、プロセッサをセットアップする最も簡単で最良の方法です。また、これを使ってプロセッサをリモートコントロールすることもできます。
- DX0.4 のボタンとスクリーンを使用します。コンピュータを接続することなく、素早く設定を更新することができます。ほとんどの設定にアクセスできますが、すべての設定にアクセスできるわけではありません。



これらの方法を組み合わせて使うこともできます。例えば、最初はデスクトップアプリを使ってDX0.4をセットアップします。その後、DX0.4のボタンとスクリーンを使って設定を更新します。

デスクトップApp

デスクトップアプリは、Martin Audioのウェブサイトから無料でダウンロードできるWindowsアプリです。



macOS はサポートしていませんが、Parallels Desktop、VMware Fusion、Apple Boot Camp Assistant などのバーチャルプラットフォームでこのアプリを実行しています。

このデスクトップアプリを使ってDX0.4をセットアップするには、アプリをインストールし、プロセッサをコンピュータに接続する必要があります。

デスクトップAppのインストール

- Martin Audioのウェブサイトへアクセスし、Support > Softwareを選択します。
- DX0.4およびDX0.6 Control Softwareまでスクロールし、ソフトウェアをダウンロードします。
- 同じ場所からユーザーガイドをダウンロードし、指示に従ってください。

プロセッサとPCの接続

プロセッサをコンピュータに接続するには、4つの方法があります:

- USB. USB ケーブルを使用して、プロセッサのフロントパネルにある USB-B ポートとコンピュータの USB ポートを接続します。



USBで一度に接続できるプロセッサは1つだけです。

- イーサネット直結。ネットワークケーブルを使用して、プロセッサのバックパネルにあるイーサネットソケットとコンピュータのイーサネットソケットを直接接続します。



イーサネットの直接接続では、一度に1台のプロセッサしか接続できません。

- イーサネットネットワークネットワークケーブルを使用して、本機の背面パネルにあるイーサネットソケットをコンピュータと同じイーサネットネットワークに接続します。



イーサネット・ネットワークを使用して、多くのプロセッサを設定し、制御することができます。

- RS-485. 本体背面のRS-485ソケットとパソコンをRS-485ケーブルで接続します。RS-485ソケットを持つPCはほとんどありませんので、RS-485 RJ45-USBアダプターが必要になります。

RS-485ネットワークは非常に堅牢で、機器間のケーブル長は最大1,200mにもなります。複数のユニットをお持ちの場合は、各ユニットのバックパネルにある2つのRS-485ポートを使ってデジチェーン接続することができます。



RS-485で最大32台のプロセッサを設定・制御できます。

ダイナミックまたはスタティックIP

イーサネットネットワークでは、ダイナミックIPまたはスタティックIPを選択できます：

- ・ダイナミックIPの場合、DHCPサーバーがネットワーク上の全デバイスにIPアドレスを割り当てます。プロセッサが5台程度までの場合は、ダイナミックIPをお勧めします。Wi-Fiルーターは、ルーターにDHCPサーバーが含まれており、Wi-Fiを使ってコンピューターをルーターに接続できるので、小規模なシステムには良い選択肢です。
- ・スタティックIPの場合、各デバイスのIPを手動で指定する必要があります。各デバイスのIPを手動で指定する必要があります。静的IPは、多数のプロセッサを持つ大規模システムで特に有効です。

ダイナミックIPまたはスタティックIPを選択するには、デスクトップアプリ(6ページ)を使用します。プロセッサのフロントパネルでは変更できません。

フロントパネルを使ったセットアップ

フロントパネルのボタンとスクリーンを使って DX0.4 をセットアップするには、以下の手順が必要です：

- ・Utility メニューを使って主な設定を行います。詳細は Utility メニュー(10 ページ)を参照してください。
- ・入力チャンネルを設定します。詳細は「入力チャンネル」(21 ページ)を参照してください。
- ・出力チャンネルを設定します。詳細は「出力チャンネル」(25 ページ)を参照してください。

システムへの接続

システム構成例については、システム例(30ページ)を参照してください。

1. 機器を接続する前に、すべてのスイッチがオフになっていること、マスターボリューム、レベルまたはゲインコントロールがすべて下げられていることを確認してください。
2. ミキシングコンソール(またはその他の信号源)のラインレベル出力を、DX0.4のインプットに接続します。
3. アンプを使用する場合、DX0.4の出力をアンプのインプットに接続します。アンプの出力をパッシブラウドスピーカーのインプットに接続します。パワードラウドスピーカーをお使いの場合、DX0.4の出力をスピーカーのインプットに接続します。
4. ミキシングコンソール(またはその他の信号源)の電源を入れます。
5. DX0.4の電源を入れます。
6. ラウドスピーカーシステムに合わせてシステムセットアップを設定

定します。はじめに(6ページ)をご参照ください。

7. DX0.4の適切な出力のミュートを解除します。

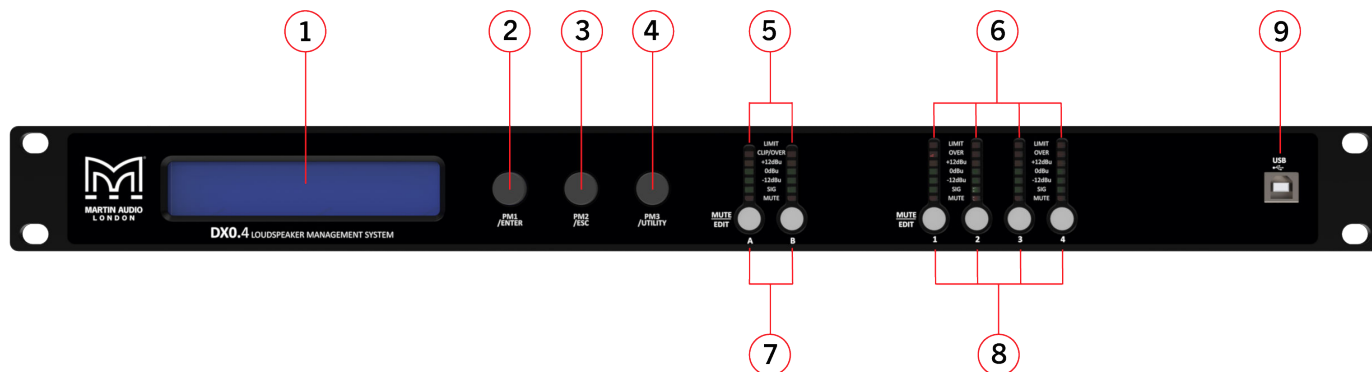
8. アンプまたはパワードラウドスピーカーをオンにします。ボリュームまたはゲインコントロールを上げます。ほとんどの場合、アンプのゲインがDX0.4のリミッター・スレッショルド・レベルと一致するように、ゲイン・コントロールを最大まで上げてください。

9. シグナルソースをスタートし、ミキサーのメインL/R フェーダーをラウドスピーカーからオーディオが聞こえるまで上げます。

注意点

- ・機器をシャットダウンするときは、まずアンプの電源を切ってください。これは、上流の機器から発生する「ドーン」などのノイズがスピーカーから出るのを防ぐためです。
- ・電源を入れるときは、アンプの電源を最後に入れる。
- ・長時間、大音量で音楽を聴かない。

フロントパネル



1. LCDディスプレイで、プロセッサの設定を確認・更新することができます。



デスクトップアプリを使用してプロセッサを設定することもできます。詳細については、デスクトップアプリ (6 ページ) を参照してください。

2. **PM1/ENTER.** プッシュボタンとしても機能するロータリーダイヤルです。メニューをスクロールするには、このダイヤルを左右に回します。メニュー項目を選択するには、このダイヤルを押します。以降、これをPM1と呼びます。
3. **PM2/ESC.** これも回転ダイヤルとプッシュボタンです。項目を編集するには、このダイヤルを左右に回す。現在のメニュー選択から抜けるには、このダイヤルを押します。以降、これをPM2と呼びます。
4. **PM3/UTILITY.** これも回転ダイヤルとプッシュボタンです。項目を編集するには、このダイヤルを左右に回します。ユーティリティ・メニューを選択するには、このダイヤルを押す。以降、これをPM3と呼びます。
5. **入力メーター.** 各入力には、メーターとして機能するLEDのバーグラフを備えています：
 - OVER (赤) 信号レベルが最大を超え、クリッピングする。
 - +12dBu (黄) 信号レベルが+12dBuを超える。
 - 0dBu (緑) 信号レベルが0dBuを超える。
 - 12dBu (緑) 信号レベルが-12dBuを超える。
 - SIG (緑) 信号は最小-40dBu。
 - Mute (赤) チャンネルがミュートされている。上記のLEDにはレベルが表示されません。
6. **出力メーター.** 各出力には、メーターとして機能するLEDのバーグラフがあります。これらのメーターは、上部に1つではなく2つの赤色LEDがある以外は、入力メーターと同じです：
 - LIMIT (赤) 信号レベルが最大を超える。ピーク・リミッター作動中。
 - OVER (赤) 信号レベルが最大を超える。プログラムリミッター作動中。
7. **入力ボタン.** これらにはAとBのラベルが付いています。各ボタンはミュートボタンと編集ボタンです：
 - 入力をミュートするには、該当するボタンを素早く押します。ミュートLEDが赤く点灯します。ミュートを解除するには、もう一度ボタンを素早く押します。赤いライトが消えます。
 - 入力を編集するには、ボタンが青く点灯するまで押し続けます。編集を停止するには、PM2を押します。

入力の編集の詳細については、入力チャンネル (21ページ) を参照してください。
8. **出力ボタン.** 1 から 4 のラベルが貼られています。各ボタンはミュートボタンと編集ボタンで、入力ボタンとまったく同じように機能します。出力の編集については、出力チャンネル (25 ページ) をご参照ください。
9. **USB-B ソケット.** プロセッサをコンピュータに接続する際に使用します。または、プロセッサ背面の Ethernet または RS485 ソケットを使用することもできます。詳しくは、プロセッサとコンピュータの接続 (6 ページ) をご覧ください。

バックパネル



- 電源.**ユニットをオンにするには、プラグを差し込み、このスイッチを「I」に押します。電源を切るには、このスイッチを「O」に押します。本機の電源がオンになると、フロントパネルのLCDディスプレイが点灯します。本機は設定変更を記憶しているため、スイッチをオンにすると、オフにしたときと同じ設定で再起動します。本機は出力にリレーを使用しており、スイッチのオン・オフ時にシステム内で不要なポップ音やノイズが発生するのを防ぎます。スイッチをオンにすると、ユニットが初期化され、リレーが切り替わります。ライブ出力は、無音状態から設定された出力レベルまでスムーズにフェードします。
 - 電源リード・ソケット.**このIEC入力、プロセッサに付属の着脱式電源ケーブルを差し込む場所です。もう一方の端をACコンセントに差し込みます。ケーブルの主電源プラグが間違っている場合は、正しいプラグの安全認可済みIECケーブルを使用するか、資格のある電気技術者にプラグの交換を依頼してください。電源ケーブルには、ライブ、ニュートラル、アース（接地）が接続されていることに注意してください。
- 

アース接続を外さないでください。危険です。
- イーサネット.**イーサネットポートは標準的なRJ45ポートです。これにより、ダイナミックIPまたはスタティックIPを使用したEthernetネットワークに接続できます。詳細は、プロセッサとコンピュータの接続(6ページ)を参照してください。ほとんどのイーサネットポートと同様に、接続状態とネットワークアクティビティを示す2つのLEDがあります。
 - RS485.**上側のRJ45ポート（INと表示されています）でRS485ネットワークに接続できます。複数のプロセッサをお持ちの場合は、下側のRJ45ポート（OUTのラベル付き）を使用して、ユニットを「デジチェーン」接続することができます。（OUT）を使用して、ユニットを「デジチェーン接続」することができます。詳細は、プロセッサとコンピュータの接続(6ページ)をご参照ください。接続には、標準Cat5eケーブルのオレンジ/白とオレンジに色分けされたピン1と2を使用します。
 - XLR出力.**4つのオスXLRコネクタは、各出力チャンネルにインピーダンスバランスのラインレベル信号を供給します。これらのコネクタとパワーアンプやパワードラウドスピーカーのインプットをケーブルで接続してください。2番ピンは+または「ホット」、3番ピンは-または「コールド」、1番ピンはグラウンドです。アンバランスのソースに接続する場合、信号をピン2に、グラウンドをピン1と3に接続してください。接続のセットアップ例については、システム例（30ページ）をご参照ください。
 - XLR入力.**2つのXLRコネクタ（メス）は、ミキサーや他のソースからのバランスラインレベル入力を受け付けます。ピン2は+または「ホット」、ピン3は-または「コールド」、ピン1はグラウンドです。アンバランスのソースからの接続は、信号をピン2に、グラウンドをピン1と3に接続してください。接続のセットアップ例については、システム例（30ページ）をご参照ください。

プロセッサはAC100Vから240Vの電圧に対応し、周波数は50Hzから60Hzです。ユニット上で何かを調整する必要はありません。

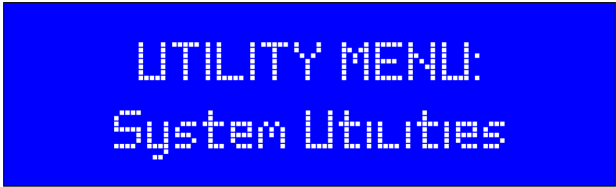
- イーサネット.**イーサネットポートは標準的なRJ45ポートです。これにより、ダイナミックIPまたはスタティックIPを使用したEthernetネットワークに接続できます。詳細は、プロセッサとコンピュータの接続(6ページ)を参照してください。ほとんどのイーサネットポートと同様に、接続状態とネットワークアクティビティを示す2つのLEDがあります。

ユーティリティメニュー

ユーティリティ・メニューを使用して、プロセッサの主な設定を行うことができます。

ユーティリティメニューを使用するには

1. 始める前に、PM1 または PM2 を押しても何も起こらないことに注意してください。また、PM1、PM2、PM3 を回しても何も起こりません。これらのボタンの詳細については、フロント・パネル（8 ページ）をご参照ください。
2. PM3 を押します。画面に Utility Menu が表示され、メニューの最初の項目は System Utilities です。



UTILITY MENU:
System Utilities

3. PM1 を左右に回して、ユーティリティメニューをスクロールします。このメニューの詳細については、以下のユーティリティメニューの項を参照してください。
4. System utilities が表示されるまで、PM1 を左に回します。
5. PM1を押すと、スクリーンの一番下の行にInput Source が表示されます。Input Source は、システムユーティリティメニューの最初の項目です。
6. PM1を左右に回して、システムユーティリティメニューをスクロールします。
7. メインメニューに戻るには、PM2 を押します。
8. PM2 を押して、メインメニューを終了します。これでスタート地点に戻りました。

ユーティリティメニューの選択

ユーティリティメニューから以下が選択可能です。:

- ・ [システムユーティリティ \(11 ページ\)](#)
- ・ [プログラムユーティリティ \(16 ページ\)](#)
- ・ [ネットワークユーティリティ \(17 ページ\)](#)
- ・ [セキュリティ・ユーティリティ \(20 ページ\)](#)

これらのメニューの選択については、後のセクションで説明します。

システムユーティリティ

システムユーティリティメニューから、以下の設定ができます：

- ・ 入力ソース (11 ページ)
- ・ シグナルジェネレーター (11 ページ)
- ・ リンク入力 (12 ページ)
- ・ リンク出力 (12 ページ)
- ・ リンクチャンネルモード (12 ページ)
- ・ リコールモード (13 ページ)
- ・ 工場出荷値設定 (13 ページ)
- ・ 出力クリップ防止 (13 ページ)
- ・ 出力ビューメーター (14 ページ)
- ・ ファームウェアバージョン (14 ページ)

これらのメニュー選択について、以下で説明します。

入力ソース

入力ソースは、プロセッサ背面のXLR入力経路のアナログ入力、または内部信号生成のいずれかです。内部信号生成を設定するには、信号ジェネレーター (11 ページ) をご参照ください。

入力ソースをアップデートするには

1. 管理者またはエキスパートとしてログインします。詳細については、セキュリティユーティリティ (20 ページ) を参照してください。



この設定を編集できるのは、管理者またはエキスパートとしてログインしている場合のみです。

2. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
3. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。
4. PM1を押して選択します。入力ソースが画面の一番下の行に表示されます。
5. PM1を押します。アナログ入力を選択するには、PM2 を左に回して、画面の最下行に Analog Inp が表示されるようにします。

Input Source
Source =Analog Inp

内部信号生成を選択するには、PM2 を右に回して、画面の一番下の行に Signal Gen と表示させます。

6. PM2 を押して、システム・ユーティリティ・メニューに戻ります。
7. 編集が終了したら、PM2 をさらに2 回押します。

シグナルジェネレーター

これにより、内部シグナル・ジェネレーターのピンク・ノイズまたはホワイト・ノイズ、および信号レベルを設定することができます。内部シグナル・ジェネレーターをオンにするには、入力ソース (11 ページ) をご参照ください。

シグナル・ジェネレーターを設定するには

1. 管理者またはエキスパートとしてログインします。詳細については、セキュリティユーティリティ (20 ページ) を参照してください。



この設定を編集できるのは、管理者またはエキスパートとしてログインしている場合のみです。

2. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
3. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。PM1を押して選択します。
4. 画面の一番下の行に Signal Generator が表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。

Input Source
Source =Signal Gen

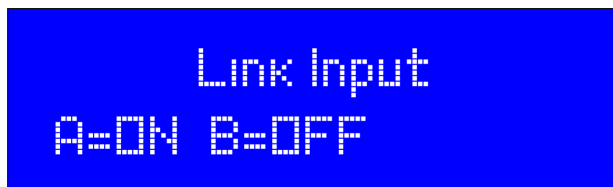
5. ピンクまたはホワイトノイズを選択するには、PM2を回転させ、ピンクまたはホワイトが画面に表示されるようにします。
6. レベルを変更するには、PM3 を回します。これでレベルが 1dBu 上下します (-30dBu ~ +10dBu) 。 +10dBu の間) 。
7. PM2 を押して、System Utilities メニューに戻ります。
8. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

入力リンク

インプット A と B をリンクさせることができます。チャンネルをリンクしても、設定の違いは変更されません。リンクされたチャンネルを編集すると、DX0.4 は自動的にリンクされたチャンネルを同じ設定に更新します。編集前の設定は変更されません。

入力をリンクするには

1. PM3 を押してユーティリティメニューを表示します。
2. システムユーティリティはスクリーンが一番下の行に表示されます。PM1 を押して選択します。
3. 画面の一番下に Link Input と表示されるまで、PM1 を回す。次に PM1 を押します。
4. A が点滅し始め、A を編集できることを示します。PM3 を右に回すと ON、左に回すと OFF になります。



5. B が点滅し始めるように PM2 を回します。PM3 を右に回すと ON、左に回すと OFF になります。



A と B をリンクさせるには、A と B を ON に設定します。A と B のリンクを解除するには、A と B を OFF に設定します。

6. PM2 を押して、System Utilities メニューに戻ります。
7. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

出力リンク

出力チャンネルをリンクすることができます。例えば、アウトプット 1 と 2 をリンクさせたり、すべてのアウトプットをリンクさせたりすることができます。チャンネルをリンクしても、設定の違いは変更されません。リンクされたチャンネルを編集すると、DX0.4 は自動的にリンクされたチャンネルを同じ設定に更新します。編集前の設定は変更されません。

出力をリンクするには

1. PM3 を押して、Utility Menu を表示します。

2. System Utilities が画面の一番下に表示されます。
3. PM1 を押して選択します。画面の一番下の行に Link Output が表示されるまで、PM1 を回します。次に PM1 を押します。
4. 1 が点滅し始め、出力 1 の設定を編集できることを示します。PM3 を右に回して ON にし、左に回して OFF にします。



5. 2 が点滅し始めるように PM2 を回します。PM3 を右に回すと ON、左に回すと OFF になります。
6. PM2 を回して、残りの出力の設定を更新します。



オンに設定された出力はすべてリンクされます。すべての出力をリンクするには、すべての出力をオンに設定します。

7. PM2 を押して、System Utilities メニューに戻ります。
8. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

リンクチャンネルモード

リンク・チャンネル・モードでは、リンクしたチャンネル間のゲイン・オフセットを維持するかどうかを選択できます。

例:

- ・ 入力 A のゲインは 0dB、入力 B のゲインは +3dB です。
- ・ チャンネル A と B をリンクします。
- ・ 入力のリンクチャンネルモードをオンに設定します。
- ・ チャンネル A のゲインを +2dB に更新します。DX0.4 は自動的にチャンネル B のゲインを +5dB (3dB のオフセットを維持するため)。
- ・ 入力のリンクチャンネルモードをオフに設定します。
- ・ チャンネル A のゲインを +1dB に更新します。
- ・ DX0.4 は自動的にチャンネル B のゲインを同じ +1dB に更新します。

リンクチャンネルモードを選択するには

1. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
2. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。PM1を押して選択します。
3. 画面の一番下に Linked Channel Mode と表示されるまで、PM1を回す。次にPM1を押します。
4. 入力の設定を変更するには、PM2を回して INP= ON または OFF を選択します。この設定を編集できるのは、入力リンクされている場合のみです。

Linked Channel Mode
Offset INP=ON OUT=OFF

5. 出力の設定を変更するには、PM3を回して OUT= ON または OFF を選択します。この設定を編集できるのは、出力がリンクされている場合のみです。
6. PM2を押して、System Utilities メニューに戻ります。
7. 終了したら、PM2を2回押してメニューシステムを終了します。

リコールモード

リコールモードでは、プリセットをリコールする際に、現在のチャンネルミュートの状態を維持するかどうかを選択できます。オフの場合、チャンネルミュートはリコールしたプリセットの設定を使用します。スイッチをオンにすると、プリセットをリコールしたときにチャンネルミュートの状態は変更されません。この設定を使用すると、プリセットを呼び出したときに突然大音量が鳴るのを防ぐことができます。プリセットを呼び出す前に、Recall モードがオンになっていることを確認し、チャンネルをミュートしてください。

リコールモードを変更するには

1. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
2. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。PM1を押して選択します。
3. スクリーンの一番下の行に Recall モードが表示されるまで、PM1を回します。次に、PM1を押します。

Recall Mode
Keep Actual Mutes = ON

4. プリセットを呼び出したときに、プリセットのミュート状態ではなく、現在のミュート状態を使用するには、PM2をONに回します。
5. プリセットを呼び出すときに、プリセットのミュート設定を使用するには、PM2をOFFに回します。PM2を押して、System Utilities メニューに戻ります。
6. 終了したら、PM2を2回押してメニューシステムを終了します。

工場出荷値の設定

これにより、すべての入出力チャンネルが工場出荷時の設定に戻ります。ネットワーク設定、パスワード、ユーザー設定などの設定には影響しません。

入出力を工場出荷時の設定に戻すには



これですべての入出力チャンネル設定が削除されます。この操作を行う前に、設定をバックアップするか、メモしておくといでしょう。

1. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
2. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。PM1を押して選択します。
3. 画面の一番下の行に Set factory value が表示されるまで、PM1を回します。次に、PM1を押します。

Set Factory Value
[Enter] To Confirm

4. これで間違いなければ、PM1を押して確認します。
5. PM2を押して、System Utilities メニューに戻ります。
6. 終了したら、PM2を2回押してメニューシステムを終了します。

出力クリップの防止

プロセッサには、出力のクリッピングを防ぐクリップリミッターが内蔵されています。デフォルトではオンになっています。必要に応じてクリップリミッターのオンオフを切り替えることができます。

クリップ・リミッターのオン/オフを切り替えるには

1. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
2. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。PM1を押して選択します。
3. 画面の一番下の行に Prevent Output Clip が表示されるまで、PM1を回します。次に、PM1を押します。

Prevent Output Clip
Prevent ENABLE = ON

4. クリップリミッターをオフにするには、PM2を左に回してオフにします。
5. クリップリミッターをオンにするには、PM2を右に回してオンにします。PM2を押して、System Utilities メニューに戻ります。
6. 終了したら、PM2を2回押してメニューシステムを終了します。

出力VUメーター

この設定により、フロントパネルの出力メーターが絶対出力レベルを表示するか、リミッター前のレベルを表示するかを選択できます。出力メーターの詳細については、フロント・パネル（8ページ）をご参照ください。

- ・ 絶対出力レベルがデフォルトです。（単位はdBu）
- ・ プリリミッター・レベルはリミット前のレベルです。（単位はdB）



プリリミッター・レベルを使用する場合、フロント・パネルのdBuラベルはもはや意味を持ちません。

プリリミッター・レベルにより、システムのヘッドルームがどの程度利用可能かを一目で確認できます。これは、2ウェイや3ウェイ・システムのHFドライブなどのシグナルに特に有効です。出力レベルは比較的低いでしょうから、メーターからはほとんど情報が得られません。ほとんどのHFデバイスは定格出力が低いので、リミッターのスレッシュホールドも比較的低いでしょう。そのため、メーターをプリリミッターに設定すると、HFコンポーネントへのドライブと、リミッターの作動にどの程度信号が近づいているかを、より明確に示すことができます。

出力Vuメーターを設定するには

1. 管理者またはエキスパートとしてログインします。詳細については、セキュリティユーティリティ（20ページ）を参照してください。



この設定を編集できるのは、管理者またはエキスパートとしてログインしている場合のみです。

2. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
3. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。
4. PM1を押して選択します。画面の一番下の行に Output Vu-Meter が表示されるまで、PM1を回します。その後、PM1を押します。
5. プリリミッターレベルを選択するには、PM2を左に回してプリリミッターを選択します。次にPM1を押します。絶対出力レベルを選択するには、PM2を右に回してを右に回します。次にPM1を押します。

Output Vu-Meter
Meter = After Process

6. PM2を押して、System Utilities メニューに戻ります。
7. 終了したら、PM2を2回押してメニューシステムを終了します。

ファームウェアバージョン

これにより、現在のファームウェアバージョンを確認することができます。FPはフロントパネルのファームウェアで、MBはマザーボードのファームウェアです。MBのバージョン番号だけをメモしておけばよい（FPを変更した場合、MBも常に更新される）。もしデスクトップアプリでファームウェアのバージョンを表示する場合（6ページ）、MBのバージョン番号が表示されます。デスクトップアプリは、ファームウェアが最新かどうかを自動的にチェックすることができます。これを行うには、デスクトップアプリがPCがインターネットに接続され、DX0.4がオンラインである必要があります。最新のファームウェア・バージョンを確認するには、Martin AudioのウェブサイトからSupport > Softwareを選択し、DX0.4とDX0.6 Control Softwareまでスクロールしてください。MBのバージョン番号が表示されます。最新のファームウェアをダウンロードするには、「DOWNLOAD SOFTWARE」ボタンをクリックします。ファームウェアはソフトウェアに同梱されています。

最新のファームウェアをインストールするには、FIRMWARE GUIDEボタンをクリックし、指示に従ってください。

ファームウェアのバージョンを表示するには

1. PM3を押してユーティリティメニューを表示します。
2. システムユーティリティはスクリーンの一番下の行に表示されます。
3. PM1を押して選択します。画面の一番下の行に Firmware Version が表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。



4. PM2 を押して、System Utilities メニューに戻ります。
5. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

プログラム・ユーティリティー

プログラム・ユーティリティー・メニューから選ぶことができます：

- プログラムを呼び出す (16 ページ)
- プログラムを保存する (16 ページ)

プログラムを呼び出す

システム・プリセットを呼び出したり、以前に保存したプリセットを呼び出ししたりすることができます

プログラムを呼び出すには

1. PM3 を押して、Utility Menu を表示します。
2. 画面の一番下の行に Program Utilities が表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
3. スクリーンの一番下の行に Recall a Program と表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。



[Enter] To Recall
P31: Flexpoint FP8

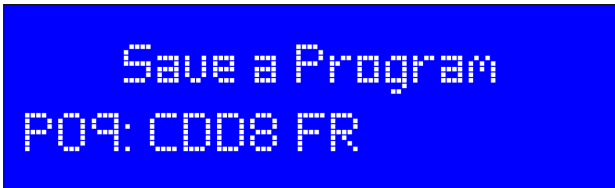
4. リコールするプログラムが画面に表示されるまで、PM1 を回します。
5. PM1 を押します。画面に [Enter] To Recall と表示されます。
6. PM1 を押して、プログラムの呼び出しを確定します。
7. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

プログラムを保存する

これにより、システム設定を32のプリセットのいずれかに保存することができます。32のプリセットは1セットしかないため、プリセットに設定を保存すると、付属の工場出荷時のプリセットが上書きされます。必要に応じて、工場出荷時の設定に戻すことができます。詳しくは、工場出荷時の設定（13ページ）をご覧ください。

プログラムを保存するには

1. PM3 を押して、Utility Menu を表示します。
2. 画面の一番下の行に Program Utilities が表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
3. 画面の一番下の行に Save a Program が表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。



Save a Program
P09: CDD8 FR

4. 適切なプリセット位置が画面に表示されるまで、PM1 を回します。例えば、あなたの設定をプリセット32として保存するには、PM1をスクリーンにP32と表示されるまで回します。



プログラムを保存すると、このプリセットの現在の設定が上書きされます。

5. PM1を押すと、Set Program Nameが画面に表示されます。
6. 入力名と同様に編集します。
7. 詳しくは、入力名（21ページ）のステップ3、4を参照してください。
8. 唯一の違いは、プログラム名が16文字までであることです。
9. PM1 を押します。画面に [Enter] To Save と表示されます。PM1 を押して確定します。
10. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

ネットワーク・ユーティリティ

ネットワーク（イーサネットまたはRS485）またはUSBケーブルを使用して、コンピュータとプロセッサを接続できます。詳細は、プロセッサとコンピュータの接続 (6 ページ) を参照してください。ネットワークを使用して接続する場合は、ネットワーク・ユーティリティ・メニュー を使用して以下を設定できます：

- ・ RS-485 ID (17ページ)
- ・ デバイス名 (17 ページ)
- ・ IPアドレス (17ページ)
- ・ サブネットマスク (18ページ)
- ・ ゲートウェイ (18 ページ)
- ・ LANモード (18ページ)

RS-485 ID

RS-485で使用するIDを設定します。01～32の間で設定できます。



RS-485上の各デバイスには、固有のIDが必要です。

RS-485のID設定をするには

1. PM3 を押して Utility Menu を表示します。
2. 画面の一番下に Network Utilities と表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
3. 画面の一番下の行に RS485 ID が表示されるまで、PM1 を回します。
4. 次に、PM1 を押します。ID を変更するには、PM2 を回します。次に、PM2 を押します。

RS-485 ID
SET ID = 05

5. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

デバイス名

これにより、DX0.4に好きな名前を付けることができます。名前は16文字までです。

デバイス名を設定するには

1. PM3 を押して Utility Menu を表示します。
2. 画面の一番下に Network Utilities と表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
3. 画面の一番下の行に Device name が表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
4. 名前を変更するには、Input name (21 ページ) ステップ 3 と 4 の説明に従って、PM2 と PM3 を回転させます。

Device Name
Name = DX0.6 Main L/R

5. 終了したら、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

IP アドレス

これにより、IPアドレスを表示または設定できます。IPアドレスを設定する必要があるのは、TCP/IP モードが静的な場合だけです。



TCP/IPモードを変更する（ダイナミックIPまたはスタティックIPを選択する）には、デスクトップアプリ（6ページ）を使用する必要があります。

IPアドレスを表示または設定するには

1. PM3 を押して Utility Menu を表示します。
2. 画面の一番下に Network Utilities と表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
3. 画面の一番下の行に IP Address が表示されるまで、PM1 を回します。PM1 を押して、IP アドレスを表示します。



以下の場合、IP アドレスはすべてゼロになります：

- ・ プロセッサがイーサネットネットワークに接続されていない。
- ・ プロセッサがイーサネットネットワークに接続され、TCP/IP モードがダイナミック IP に設定され、ネットワーク上に DHCP サーバーが存在しない。

4. IP アドレスを変更するには、入力名（21 ページ）のステップ 3 と 4 の説明に従って、PM2 と PM3 を回転させます。



TCP/IPモードが静的IPの場合のみ、IPアドレスを編集できます。このモードは、デスクトップアプリ（ページ 6）を使用してのみ変更できます。

IP Address
IP Addr=010.011.002.168

5. 終了したら、PM2を2回押してメニューシステムを終了します。

サブネットマスク

これにより、プロセッサのサブネットマスクを表示できます。



サブネットマスクを編集するには、デスクトップアプリ（6ページ）を使用する必要があります。

サブネットマスクを表示するには

1. PM3 を押して Utility Menu を表示します。
2. 画面の一番下に Network Utilities と表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
3. サブネットマスクが画面の一番下の行に表示されるまで、PM1 を回します。PM1 を押して、サブネットマスクを表示します。

Subnet Mask
SubMask=255.255.255.000

4. PM2 を押して終了します。
5. 終了する場合は、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

ゲートウェイ

これにより、プロセッサのゲートウェイを表示することができます。



ゲートウェイを編集するには、デスクトップアプリ（6ページ）を使用する必要があります。

ゲートウェイを見るには

1. PM3 を押して Utility Menu を表示します。
2. 画面の一番下に Network Utilities と表示されるまで、PM1 を回します。次に、PM1 を押します。
3. 画面の一番下の行に Gateway が表示されるまで、PM1 を回す。次に、PM1 を押してゲートウェイを表示します。

Gateway
Gateway=010.011.002.001

4. PM2 を押して終了します。
5. 終了する場合は、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

LAN モード

プロセッサの TCP/IP 接続モードを表示することができます。これはダイナミック IP またはスタティック IP です。

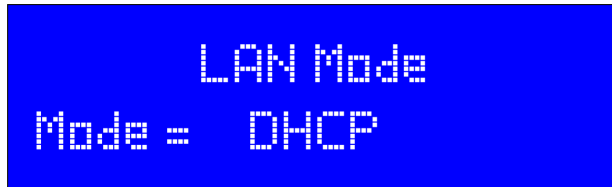


LAN モードを編集するには、デスクトップアプリ（6 ページ）を使用する必要があります。

LANモードを表示するには

1. PM3 を押して、Utility Menu を表示します。

2. 画面の一番下に Network Utilities と表示されるまで、PM1 を回します。次に PM1 を押します。
3. 画面の最下行に LAN モードが表示されるまで、PM1 を回します。次に PM1 を押します。



モードはDHCP（ダイナミックIPの場合）またはスタティックIPのどちらかです。

4. PM2 を押して終了します。
5. 終了する場合は、PM2 を 2 回押してメニューシステムを終了します。

セキュリティユーティリティ

これにより、管理者またはエキスパートとしてプロセッサにログインまたはログアウトすることができます。ログインしていない（またはログアウトしている）場合は、ベーシックユーザーです。

- ・ 管理者ユーザーはすべての設定にアクセスできます。
- ・ エキスパートユーザーは、ユーザー設定を除くすべての設定に（デフォルトで）アクセスできます。
- ・ ベーシックユーザーは（デフォルトで）多くの設定にアクセスできません。

管理者であれば、ベーシックユーザーとエキスパートユーザーがアクセスできる設定を制限することができます。これは、Desktop app (6 ページ)でユーザー設定を更新することで行います。



パスワードとユーザー設定を更新するには、デスクトップアプリを使用します (ページ 6)。プロセッサを使用してパスワードやユーザー設定を更新することはできません。

ログアウト（下記参照）またはプロセッサの電源を切るまで、管理者またはエキスパートとしてログインしたままになります。



プロセッサのパスワードは6文字である。

7. パスワードが正しければ、PM1を押してログインします。

ログアウトするには

プロセッサの電源を切るか、次のことを行ってください：

1. PM3を押して、Utility Menuを表示します。
2. PM1を回して、スクリーンの一番下の行にSecurity Utilitiesが表示されるようにします。次に、PM1 を押します。
3. PM2を右に回して、画面の一番下の行にLogoutが表示されるようにします。
4. PM1を押してログアウトします。

管理者またはエキスパートとしてログインするには



デフォルトの管理者パスワードは 111111
エキスパートパスワードのデフォルトは222222

1. PM3を押して、Utility Menuを表示します。
2. PM1を回して、スクリーンの一番下の行にSecurity Utilitiesが表示されるようにします。次にPM1を押します。
3. Enter Password Login が表示されます。PM1を押して選択すると、最初の文字が点滅し、この文字を編集できることを示します。パスワードの編集は、入力チャンネル名の編集とほぼ同じであることに注意してください。詳細については、入力名 (21 ページ)を参照してください。
4. 点滅している文字を変更するには、PM3 を回します。
5. パスワードの次の文字に移動するには、PM2 を右にワンクリックします。PM2 を右にワンクリックします。
6. この文字を変更するには、PM3 を回します。パスワードの残りの部分について、最後の2つの手順を繰り返します。

入力チャンネル

入力チャンネルを設定するには、フロントパネル中央の入力ボタンを使用します。これらはミュートボタンとエディットボタンとして機能します。詳しくはフロントパネル（8 ページ）をご参照ください。

入力チャンネルを編集するには

1. ボタンが青くなり、入力チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押し続けます。
2. 以前に入力を編集したことがある場合、表示されるメニュー項目は、最後に選択したメニュー項目となります。
3. メニューを移動するには、PM1 を左右に回します。
4. メニュー項目を選択するには、PM1 を押します。左下に矢印 → が表示され、選択したことを示します。各メニュー項目については、以下のセクションを参照してください。
5. メニュー項目を選択したら、PM2 を押してメニューに戻ります。メニューから
 - ・他のチャンネルで同じ設定を確認するには、他の入力チャンネルボタンを長押しします。
 - ・別のメニュー項目を更新するには、PM1 を回します。メニューを終了するには、PM2 を押します。
 - ・チャンネルボタンの青いライトが消えます。



変更を加えるとすぐに、DX0.4はその変更を保存します。変更を保存するために別の手順を踏む必要はありません。

入力チャンネルメニュー

入力チャンネルメニューでは、以下の設定ができます：

- ・名前。入力名 (21ページ)を参照。
- ・N. ゲート。入力ノイズゲート (22 ページ)を参照。
- ・ゲイン (Gain)。入力ゲイン (22 ページ)を参照。
- ・Polarity (極性)。入力極性 (22 ページ)を参照。
- ・ディレイ (Delay)。入力ディレイ (23ページ)を参照。
- ・EQ E/N. 入力 EQ を有効にする (23 ページ)を参照。
- ・PEQ-01 から PEQ-10. 10 バンド入力 EQ (23ページ)をご参照ください。

入力名

これにより、入力チャンネル名を好きなもの（最大 6 文字）に変更することができます。デフォルトの入力チャンネル名は In L と In R です。

入力チャンネル名を変更するには

ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押します。詳しくは、入力チャンネル（21ページ）をご覧ください。

1. Name が表示されている場合は、PM1 を押してメニューから選択します。
2. 表示されていない場合は、Name が表示されるまで PM1 を左に回し、PM1 を押します。名前の最初の文字が点滅し始め、この文字を編集できることを示します。



3. PM3 を回転させて、最初の文字を変更します（例：B から C）。小文字の場合は、PM3 を右に回し続けます。数字の場合は、PM3 を大文字の左側に回転させます。PM3 を回転させると、文字の順番は次のようになります。



4. PM2 を回して、名前に沿って前後に移動します。編集する文字が点滅し始めます。次に、PM3 を使ってこの文字を変更します。
5. 編集が終わったら、PM2 を押してメニューに戻ります。次にできることについては、Input channels (21 ページ) step 5 を参照してください。

入力ノイズゲート

インプットノイズゲートは、インプットからのバックグラウンドノイズのレベルを自動的に下げることができます。これにより、ハムやヒスを低減することができます。スレッシュホールド、リリースタイム、アタックタイムを設定できます。

- **Threshold**は、ノイズゲートが開いて信号を通す入力レベルです。
- **Release time**は、ゲートが閉じるまでの時間を指定する。入力レベルが**Threshold**を下回ってからゲートが閉じるまでの時間である。
- **Attack time**は、ゲートが開く速さを指定します。入力レベルが**Threshold**を超えてからゲートが開くまでの時間です。

入力ノイズゲートを編集するには

1. ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押します。詳しくは、入力チャンネル（21 ページ）をご覧ください。
2. 画面右上に N. Gate が表示されるまで PM1 を回し、PM1 を押します。ノイズゲートのオン／オフを切り替えるには、左下に Enable と表示されるまで PM1 を回します。
3. 次に PM2 を回して ON または OFF を選択します。スレッシュホールドを設定するには（上記参照）、Threshold が左下に表示されるまで PM1 を回します。次に PM2 を回して、スレッシュホールドを 5dBu ステップで増減します（-45～80dBu の間）。
4. リリース・タイム（上記参照）を設定するには、PM1 が左下に表示されるまで回します。次に PM2 を回して、ミリ秒単位で時間を増減します（1ms から 1s の間）。
5. アタック・タイム（上記参照）を設定するには、PM1 を回転させます。Atk Time が左下に表示されるまで PM1 を回します。次に PM2 を回して、時間をミリ秒単位で増減します（1ms から 1s の間）。
6. 編集が終わったら、PM2 を押してメニューに戻ります。
7. 次にできることについては、Input channels (21 ページ) step 5 を参照してください。



入力ゲイン

入力ゲインは、システム全体のレベルを上下に調整することができます。信号ソースからのプログラム素材の信号レベルのばらつきを補正するために使用できます。入力は+12～-18dBの間で調整できます。

入力ゲインを変更するには

1. ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押します。詳しくは、入力チャンネル（21 ページ）をご覧ください。
2. 画面右上に Gain が表示されるまで PM1 を回し、PM1 を押します。
3. PM2 を回して、ゲインを 1dB ステップで調整します。
4. PM3 を回して、0.1dB ステップでゲインを調整します。これにより、より正確なコントロールが可能になります。
5. 編集が終わったら、PM2 を押してメニューに戻ります。次にできることについては、Input channels (21 ページ) step 5 をご覧ください。



GG（画面右下）はグループゲイン。グループからチャンネルに追加されるゲインです。



グループゲインを設定するには、デスクトップアプリ（6 ページ）を使用する必要があります。

グループゲインは、複数のプロセッサを使用するシステムプロジェクト用に設計されています。グループゲインは+12～-18dBの間で変化し、チャンネルゲインと合計されます。例えば、チャンネルゲインを+6dB、グループゲインを-3dBに設定した場合、入力のネットゲインは+3dBとなります。

入力極性

Polarity は入力チャンネルを反転させ、実質的に180°の位相シフトを加えます。

入力極性を変更するには

1. ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押します。詳しくは、入力チャンネル（21 ページ）をご覧ください。
2. 画面右上に Polarity が表示されるまで PM1 を回し、PM1 を押します。
3. PM2 を左に回して Inverted を選択するか、右に回して Normal を選択します。
4. 編集が終わったら、PM2 を押してメニューに戻ります。次にできることについては、Input channels (21 ページ) step 5 を参照してください。



入力ディレイ

入力ディレイは、システムのコンポーネントを互いに、または生楽器に、あるいはその両方にタイムアライメントするのに便利です。ディレイは以下のように時間または距離で設定できます：

- ・ 時間（ミリ秒）（0～600.979）
- ・ 距離（メートル）（0～204.332）
- ・ 距離（フィート）（0～670.383）

入力ディレイを設定するには

1. ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押します。詳しくは、入力チャンネル（21 ページ）をご覧ください。
2. 画面右上に Delay が表示されるまで PM1 を回し、PM1 を押します。
3. ミリ秒は ms、メートルは M、フィートは ft を選択するには、PM1 を回します。
4. コース調整（±1.000ms、±0.340m、±1.115ft）をするには、PM1 を回転させます。
5. コース調整（±1.000ms、±0.340m or ±1.115ft）を行うには、PM2 を回します。
6. コース調整（±0.0208ms、±0.007m または ±0.023 フィート）をするには、PM3 を回転させます。
7. 編集が終わったら、PM2 を押してメニューに戻ります。次にできることは、入力チャンネル（21 ページ）のステップ 5 を参照してください。



インプットEQの有効化

これにより、10 バンドのインプット EQ 全体をバイパスすることができます。インプット EQ を使用した場合と使用しない場合のサウンドを素早く比較することができます。各 EQ パラメーターは変更されません。10 バンドインプット EQ の詳細については、10 バンドインプット EQ（23 ページ）をご参照ください。

入力EQのオン／オフを切り替えるには

1. ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押します。詳しくは、入力チャンネル（21 ページ）をご覧ください。
2. 画面右上に EQ E/N が表示されるまで PM1 を回し、PM1 を押します。
3. EQ をオフに切り替えるには、PM2 を左に回して OFF を選択します。
4. EQ をオンに切り替えるには、PM2 を右に回してオンを選択します。
5. 編集が終了したら、PM2 を押してメニューに戻ります。次にできることについては、Input channels (21 ページ) step 5 をご覧ください。



10バンド入力EQ

各入力チャンネルには10バンドのパラメトリックEQ（PEQ）が用意されています。各バンドは同一で、タイプ、周波数、ゲイン、Q、スロープを編集できます。インプット EQ は、サウンドシステム全体のレスポンスを調整するのに便利です。特に会場の音響特性に起因する異常を修正する場合に便利です。その後、推奨されるスピーカーEQに出力EQを使用できます。詳しくは8バンド出力EQ（29ページ）をご覧ください。

10バンドの入力EQを編集するには

1. ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、A または B ボタンを押します。詳しくは、入力チャンネル（21 ページ）をご覧ください。

2. EQがオフになっている場合は、オンにする必要があります。詳しくは、Enable input EQ (23ページ) をご覧ください。



EQバンドをオンにできるのは、EQがオンの場合だけです。

3. 画面右上に適切な EQ バンド (PEQ-01 から PEQ-10) が表示されるまで PM1 を回し、PM1 を押します。例えば、10 番目の EQ バンドを選択するには、PM1 を右上に PEQ-10 と表示されるまで回転させ、PM1 を押します。が表示されるまで PM1 を回し、PM1 を押します。
4. この EQ バンドをオンまたはオフに切り替えるには、E/N が左下に表示されるまで PM1 を回します。次に PM2 を左に回して OFF を選択し、右に回して ON を選択します。



タイプ、周波数、ゲイン、Q、スロープを編集できるのは、EQ バンドがオンになっている場合のみです。

5. タイプを選択するには、E/N が左下、Type が右下に表示されるまで PM1 を回します。E/N が ON であることを確認し、PM3 を回してタイプを選択する。
6. 選択可能なタイプのリストについては、下の表を参照。周波数を更新するには、E/N が ON であることを確認し、Frequency が左下に表示されるまで PM1 を回します。周波数を 100Hz 単位で変更するには、PM2 を回します。周波数を 1Hz 単位で変更するには、PM3 を回します。最小値は 20Hz で、最大値はタイプによって異なります。
7. ゲインを更新するには、E/N が ON であることを確認し、左下に Gain が表示されるまで PM1 を回します。ゲインを 0.1dB 上下させるには、PM2 を回します。(を回します (-15dB から +15dB の間))。



ゲインを編集できるのは、一部の EQ タイプのみです。

8. Q を更新するには、E/N が ON であることを確認し、Gain が左下、Q が右下に表示されるまで PM1 を回す。次に PM3 を回して Q 値を変更します。



Q を編集できるのは、一部の EQ タイプだけです。

9. スロープ (S) を更新するには、E/N が ON になっていることを確認し、Gain が左下、S が右下に表示されるまで PM1 を回転させる。次に PM3 を回してスロープ値を変更します。



スロープを編集できるのは、一部の EQ タイプのみです。

10. 編集が終了したら、PM2 を押してメニューに戻ります。次にできることについては、入力チャンネル (21 ページ) ステップ 5 を参照してください。

In L PEQ-01
→ E/N=ON Type=BELL

EQ タイプ

Name on screen	Description
BELL	Bell (constant Q). This is the default.
HiShvS	High shelf with preset slope
HiShvQ	High shelf with variable Q
LoShvS	Low shelf with preset slope
LoShvQ	Low shelf with variable Q
LP 1st	Low pass first order (classic 6dB/Oct)
LP 2nd	Low pass second order (classic 6dB/Oct)
LP Q	Low pass with variable Q (classic 6dB/Oct)
HP 1st	High pass first order (classic 12dB/Oct)
HP 2nd	High pass second order (classic 12dB/Oct)
HP Q	High pass with variable Q (classic 12dB/Oct)
Notch	Notch
AllPs1	All pass first order
AllPs2	All pass second order

出力チャンネル

出力チャンネルを編集するには、フロントパネル右の出力ボタンを使用します。これらはミュートボタンとエディットボタンとして機能します。詳しくはフロントパネル (8ページ) をご参照ください。

出力設定により、以下のことが可能になります。

- ・ スピーカーシステムの性能を最大限に引き出します。
- ・ 過大な音量による破損の可能性を最小限にします。

出力チャンネルを編集するには

1.適切な出力ボタンを、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押し続けます。例えば、チャンネル1を編集する場合、ボタンを長押しします。

以前に出力を編集したことがある場合、表示されるメニュー項目は前回のメニュー項目となります。

メニューを移動するには、**PM1**を左右に回します。

2.メニュー項目を選択するには、**PM1**を押します。左下に矢印→が表示され、選択したことを示します。

各メニュー項目については、以下のセクションを参照してください。

4.メニュー項目を選択したら、**PM2**を押してメニューに戻ります。

5.メニューから

他の出力チャンネルで同じ設定を確認するには、他の出力チャンネルボタンを長押しします。

別のメニュー項目を更新するには、**PM1**を回します。

メニューを終了するには、**PM2**を押します。チャンネルボタンの青ランプが消灯します。



変更を加えるとすぐに、DX0.4はその変更を保存します。変更を保存するために別の手順を踏む必要はありません。

出力チャンネルメニュー

出力チャンネルメニューでは、以下の設定が可能です：

- ・ Name&FCP. 出力名 (25 ページ)、およびチャンネルを工場出荷時の設定に戻す (26 ページ) を参照してください。

- ・ ソース：出力ソース (26ページ)
- ・ ゲイン (Gain)：出力ゲイン (26ページ)
- ・ 参照極性 (Polarity)：出力極性 (27ページ)。
- ・ ディレイ (Delay)：出力ディレイ (27 ページ)
- ・ ピークリミット (Peak Lim.): ピークリミッター (27 ページ)
- ・ Prog Lim.: プログラムリミッター (27 ページ)
- ・ FIR E/N. 出力:FIR イネーブル (28 ページ)
- ・ HPF.: ハイパスフィルタ (28 ページ)
- ・ LPF.: ローパスフィルタ (28 ページ)
- ・ EQ E/N.: 出力 EQ の有効化 (29 ページ)
- ・ PEQ-01~PEQ-08:8 バンド出力 EQ (29ページ)

出力名

各出力チャンネル名は好きなものに変更できます (最大 6文字)。

出力チャンネル名を変更するには

1.該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳しくは出力チャンネル (25 ページ) をご覧ください。

2.入力チャンネル名と出力チャンネル名の変更はほぼ同じなので、ステップ 2 から入力名 (21 ページ) の手順を使用します。

唯一の違いは、出力チャンネルの場合、**Name** ではなく **Name+FCP** を選択することです。



FCPIは Factory Channel Preset の略です。詳しくは、チャンネルを工場出荷時の設定に戻す (26 ページ) をご覧ください。

CH-4 Name+FCP
→Name = SUB R

チャンネルを工場出荷時の状態に戻す

出力チャンネルを工場出荷時の設定に戻すことができます。これにより、ゲインは0dB、ディレイは0ms、EQはフラット、ハイパスフィルターとローパスフィルターはバイパスなどに設定されます。

これは、「真っ白なキャンパス」から始める素早い方法です。出力チャンネルのプリセットがロックされた出力をリセットすることもできます。プリセットのロックは、スピーカーの性能に悪影響を及ぼす可能性のあるパラメーター（クロスオーバー・スロープ、イコライザー、リミッター設定）の更新を阻止します。

デスクトップ・アプリケーションにバンドルされているMartin Audioスピーカー出力プリセットのライブラリ（6ページ）は、すべてロックされています。これにより、スピーカーのプリセットは、Martin Audioの研究開発チームがスピーカーを設計したときに意図した音質を正確に再現します。

また、ロックされたプリセットを独自に作成することで、誰にも設定をいじられないようにすることもできます。すべての出力にロックされたプリセットを設定することのデメリットは、プロセッサを他の用途に使用できなくなることです。チャンネルを工場出荷時のデフォルトにリセットすると、出力チャンネルの設定を再び自由に編集できるようになります。

チャンネルを工場出荷時のデフォルトにリセットするには

- 1.該当する出力ボタン1〜4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細は、出力チャンネル（25ページ）を参照してください。
- 2.Name&FCPが右上に表示されるまでPM1を回し、PM1を押して選択します。FCPはファクトリーチャンネルプリセットです。
- 3.Recall Factory CHPresetが下段に表示されるまでPM1を回します。
- 4.PM1を押して選択します。



このチャンネルをリセットすると、そのチャンネルのすべてのパラメータ設定が失われます。

- 5.画面にRecall Channel Preset?と表示されます。PM1を押して確定すると、チャンネルは工場出荷時の設定にリセットされます。
- 6.編集が終わったら、PM2を押してメニューに戻ります。次にできることについては、Output channels (page 25) step 5を参照してください。

出力ソース

この出力チャンネルにルーティングされる入力ソースを選択します。また、このチャンネルのゲインを0db から -30dB まで設定できます。

これは、サブ、フロントフィル、ディレイなどのモノラルの用途で、入力チャンネルAとBの両方を同じ出力にルーティングする場合に便利です。同じような2つの入力信号は、当然ながら合計すると出力が大きくなります。数dBの減衰を加えることで、これを補正することができます。

ソースのアップデートの仕方

- 1.該当する出力ボタン1〜4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細は、出力チャンネル（25ページ）を参照してください。
- 2.Sourceが右上に表示されるまでPM1を回します。次にPM1を押します。
- 3.入力チャンネル名を選択するには、PM1を回します。
- 4.入力チャンネルをオンまたはオフに切り替えるには、PM2を左に回してOFF、右に回してONにします。
- 5.ゲインを変更するには（上記参照）、PM3を回します。
- 6.編集が終わったら、PM2を押してメニューに戻ります。次にできることは、Output channels (page 25) step 5を参照してください。



出力ゲイン

出力ゲインは、システム全体のレベルを上下に調整することができます。これを使用して、信号ソースからのプログラム素材の信号レベルの変動を補正することができます。出力ゲインは+12〜-18dBの間で調整できます。

出力ゲインを変更するには

- 1.該当する出力ボタン1〜4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳しくは出力チャンネル（25ページ）をご参照ください。
- 2.入力ゲイン、出力ゲインの変更はほぼ同じですので、ステップ2から入力ゲイン（22ページ）の手順で行ってください。

出力極性

極性により、出力チャンネルを反転させることができ、実質的に180°の位相シフトを加えることができます。

出力極性を変更するには

1. ボタンが青くなり、チャンネルメニューが表示されるまで、適切な出力ボタン1~4を押します。詳しくは出力チャンネル（25ページ）をご覧ください。

2. 入力と出力の極性変更はほぼ同じですので、入力極性（22ページ）の説明をステップ2から使用してください。

・ **PM2** を回してピークリミット(ThrOf)を 1dBu ステップで変更します。

・ **PM3** を回すとピークリミットを 0.1dBu ステップで変更できます。微調整が可能です。



右下の**PTI**はピーク・スレッシュホールドです。プログラム・リミッターとピーク・リミッターの合計です。最大ピーク・スレッシュホールドは20dBuです。

出力ディレイ

出力ディレイは、システムのコンポーネントを互いに、または生楽器、あるいはその両方とタイムアライメントを合わせるのに便利です。

出力ディレイを更新するには

1. 該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細は、出力チャンネル (25ページ)を参照してください。

2. 入力ディレイと出力ディレイの更新はほぼ同じなので、ステップ2から入力ディレイ (23ページ)の説明に従ってください。

3. リリース時間を変更するには、**PM1**を回転させ、スクリーンの一番下の行に**Rel Time**と表示させる。次に**PM2**を回転させ、以下のリリース時間のいずれかを選択する：

▪ Slow = 800ms

▪ Mid = 350ms

▪ Fast = 91ms

4. 編集が終わったら、**PM2**を押してメニューに戻ります。次にできることについては、Output channels (page 25) step 5を参照してください。

ピークリミッター

ピーク・リミッターは、音楽信号の短期的なピークを制限し、スピーカー・ドライバーの過度のコーン・エクスカーションによる損傷を防ぐように設計されています。ピーク・リミットを指定すると、プロセッサはこのリミットをプログラム・リミッターに追加します。

プログラム・リミッターは、長期の過剰なパワーから保護します。詳細は、プログラム・リミッター (27 ページ)をご覧ください。ピーク・スレッシュホールドは、プログラム・リミッターにピーク・リミッターを加えたものです。

なお、マーチン・オーディオ・スピーカーの定格出力は、AESワットで表記し、ピーク定格はAESの数値の4倍 (6dB) 高くしています。ピークリミッターの設定は、スレッシュホールドとリリースタイムを設定することで行います。

プログラムリミッター

プログラム・リミッターを使用すると、スピーカーに印加される長期的なパワーを制御できます。

これにより、ボイスコイルの過熱による損傷からスピーカーを保護します。プログラムリミッターのスレッシュホールド、リリースタイム、アタックタイムを設定できます。



DX0.4Iにはピーク・リミッターも搭載されています。詳しくはピーク・リミッター（27 ページ）をご参照ください。

ピークリミッターを設定するには

1. 該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細については、出力チャンネル（25ページ）を参照してください。

2. ピークリミットを変更するには、**Peak Lim**が右上に表示されるまで**PM1**を回し、**PM1**を押して選択します。次に：

プログラムリミッターの設定

1. 該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細は、出力チャンネル (25ページ)を参照してください。

2. スレッシュホールドを変更するには、**Prog Lim**が右上に表示されるまで**PM1**を回し、**PM1**を押して選択します。次に

・ **PM2**を回してスレッシュホールドを1dBuステップで変更します。

・PM3 を回して Threshold を 0.2dBu 単位で変更します。

3. リリースタイムを変更するには、PM1を回転させ、Rel Timeが画面の一番下の行に表示されるようにします。次にPM2を回します。
4. アタックタイムを変更するには、Atk Timeが画面の一番下に表示されるようにPM1を回します。次にPM2を回します。
5. 編集が終わったら、PM2を押してメニューに戻ります。次にできることは、Output channels (25ページ) のステップ5を参照してください。

出力 FIR enable

FIR enable は、FIR EQ フィルタのオンオフを切り替えます。FIR とは Finite Impulse Response (有限インパルス応答) のことです。



FIR EQ フィルタをロードするには、Desktop アプリを使用する必要があります (6 ページ)。プロセッサを使用してFIR EQフィルタをロードすることはできません。

FIRの オン／オフを 切り替える

1. 管理者またはエキスパートとしてログインします。

詳細についてはセキュリティユーティリティ (20 ページ) を参照。



管理者またはエキスパートとしてログインしている場合のみ、FIRのオン/オフを切り替えることができます。

2. 該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細は、出力チャンネル (25 ページ) を参照してください。

3. **FIR E/N**が右上に表示されるまで**PM1**を回します。を押して選択します。

PM1を押して選択します。

4. FIRをオンにするには、**PM2**を右に回して**ON**を選択します。FIRをオフにするには、**PM2**を左に回して**OFF**を選択します。

5. 編集が終わったら、**PM2**を押してメニューに戻ります。次にできることは、出力チャンネル (25ページ) のステップ5を参照してください。

ハイパスフィルター

ハイパスフィルターとローパスフィルター (28 ページ) を併用することで、マルチウェイラウドスピーカーとサブウーファーシステムにクロスオーバーを設定することができます。

また、フルレンジラウドスピーカーでは効率的に再生できず、スピーカーにダメージを与える可能性のある低域をロールオフするために、ハイパスフィルターを使用することもできます。

ハイパスフィルターの編集

1. 該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細は、出力チャンネル (25 ページ) を参照してください。

2. **HPF**が 右上に表示されるまで**PM1**を回し、PM1を押して選択します。

PM1を押して選択します。

3. 周波数を100Hzステップで変更するには、**PM2** を回します。

4. 周波数を1Hzステップで変更するには、**PM3** を回します。

5. スロープを変更するには、**PM1**を回転させ、スクリーンが一番下の行に**スロープ**が表示されるようにします。次に**PM2**を回転させて勾配を選択する。使用可能なスロープの一覧は、下の表を参照。

6. 編集が終わったら、**PM2**を押してメニューに戻ります。次にできることについては、出力チャンネル (25ページ) ステップ5を参照してください。

ハイ & ローパスフィルターの勾配

Name on screen	Description
Bypass	Bypass
-6dB BW	Butterworth -6dB/octave
-12dB BW	Butterworth -12dB/octave
-12dB LR	Linkwitz-Riley -12dB/octave
-12dB BS	Bessel -12dB/octave
-18dB BW	Butterworth -18dB/octave
-24dB BW	Butterworth -24dB/octave
-24dB LR	Linkwitz-Riley -24dB/octave
-24dB BS	Bessel -24dB/octave
-36dB BW	Butterworth -36dB/octave
-36dB LR	Linkwitz-Riley -36dB/octave
-48dB BW	Butterworth -48dB/octave
-48dB LR	Linkwitz-Riley -48dB/octave

ローパスフィルター

ローパスフィルターとハイパスフィルター (28 ページ) を組み合わせ、マルチウェイのラウドスピーカーやサブウーファーシステムにクロスオーバーを設定することができます。ラウドスピーカーとサブウーファーシステムのクロスオーバーを設定することができます。こうすることで、システムを最良のサウンドで、最も効率的に動作させることができます。例えば、3 ウェイのステレオシステムの場合、低域、中域、高域の各トランスデューサーに供給される出力にハイパス、ローパスフィルターを使用することで、各トランスデューサーが以下のレンジを再生するようにできます。各トランスデューサーが最適な音域を再生するようにします。

ローパスフィルターの編集

- 1.該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳細は、出力チャンネル（25ページ）を参照してください。
- 2.LPFが右上に表示されるまでPM1を回し、PM1を押して選択します。
- 3.100Hz ステップで周波数を変更するには、PM2 を回します。1Hz ステップで周波数を変更するには、PM3 を回します。
- 4.スロープを変更するには、PM1を回転させ、スクリーンの一番下の行にスロープが表示されるようにします。次にPM2を回して勾配を選択します。使用可能なスロープの一覧は、ハイパス・フィルター（28ページ）のセクションの表を参照。
- 5.編集が終わったら、PM2を押してメニューに戻ります。次にできることについては、出力チャンネル（25 ページ）のステップ5を参照してください。

2. EQ がオフになっている場合は、Enable output EQ (29 ページ) の説明に従ってオンにします。



EQバンドをオンにできるのは、EQがオンの場合だけです。

3. インプットEQとアウトプットEQの設定はほとんど同じです。

出力 EQを有効にする

これにより、8 バンドの出力 EQ 全体をバイパスすることができます。出力 EQ を使用した場合と使用しない場合のサウンドを素早く比較することができます。各 EQ パラメーターは変更されません。8バンド出力EQの詳細については、8バンド出力EQ（29ページ）をご参照ください。

出力 EQのオン / オフを切り替えるには

- 1.該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳しくは出力チャンネル（25ページ）をご参照ください。
- 2.入力EQと出力EQのオン／オフの切り替えはほぼ同じなので、ステップ2からEnable input EQ（23ページ）の説明を参考にしてください。

8バンド出力EQ

各出力チャンネルには8バンドのパラメトリックEQ（PEQ）が用意されています。各バンドは同一で、タイプ、周波数、ゲイン、Q、スロープを編集できます。出力EQを使用して、特定のラウドスピーカーやトランスデューサーのレスポンスを調整したり、マルチルームセットアップで部屋の異常を補正することができます。出力EQに加えて、DX0.4は10バンドの入力EQを備えています。詳しくは10バンド入力EQ（23ページ）をご覧ください。

8バンドの出力EQを変更するには

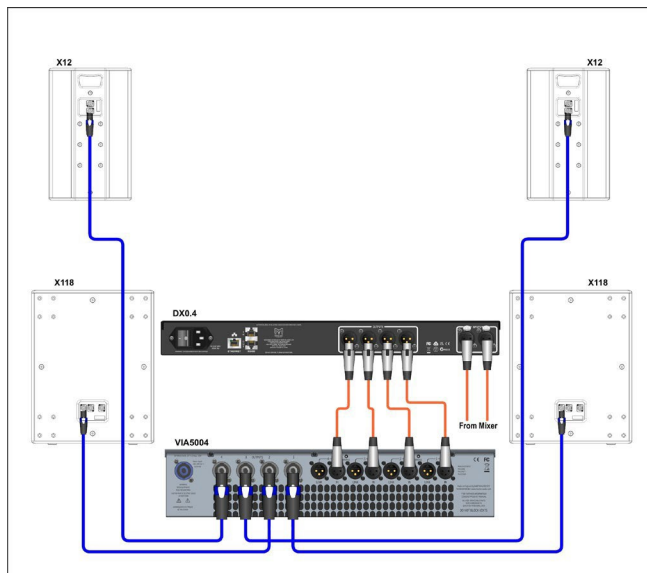
- 1.該当する出力ボタン1~4を、ボタンが青くなりチャンネルメニューが表示されるまで押します。詳しくは、出力チャンネル（25ページ）をご覧ください。

システム例

以下のセクションでは、6つのシステムセットアップ例の接続図を示します：

BlacklineX12とX118サブウーファー（30ページ）
 O-LineアレイとSX112サブウーファー（30ページ）
 LE200モニター2組（31ページ）
 CDD12、CDD6、SX212サブ（31ページ）
 THVとSX118サブ（32ページ）
 BlacklineX12とSCX115サブウーファー（32ページ）

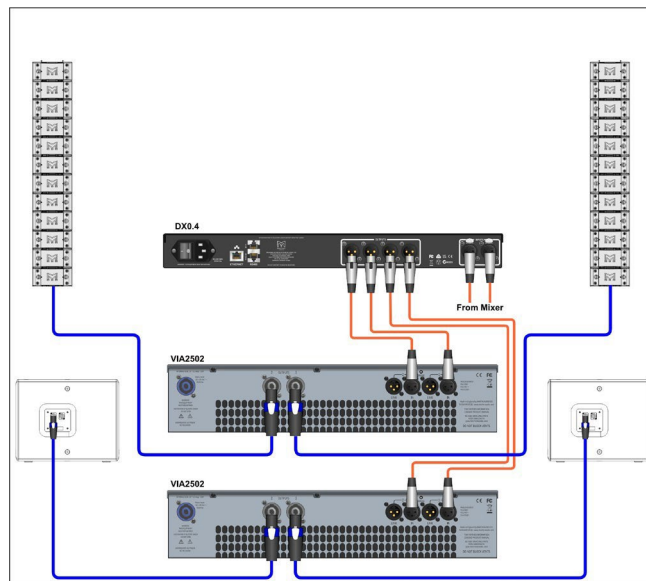
BlacklineX12 と X118 subs



このシステムは典型的なBlacklineXのポータブルシステムで、パブやバー、小さなクラブでギグを行うバンドやDJに適しています。DX0.4はステレオで動作するように設定されており、システムはアクティブにバイアンプ駆動されます。ミキサーからの左右のラインレベルXLR出力は、DX0.4 ProcessorのAおよびB XLR入力に供給されます。DX0.4のXLR出力1〜4は、Martin Audio VIA5004の4チャンネルパワーアンプのXLR入力1〜4に供給されます。パワーアンプのCH1とCH2のNL4スピーカー出力は、ステージの両側に設置された2台のMartin Audio X118サブウーファーに供給されます。アンプのCH3とCH4のNL4スピーカー出力は、2台のMartin Audio X12ラウドスピーカーの入力に供給されます。

これらはX118の上に配置し、おそらくHTKCT04のようなディスタンスバーを使用してX12の高さを確保します。こうすることで、高い周波数が観客に遮られることがなくなります。DX0.4を設定するには、X118とX12の出力プリセットを適切なチャンネルで呼び出します。

O-Line arrays と SX112 subs

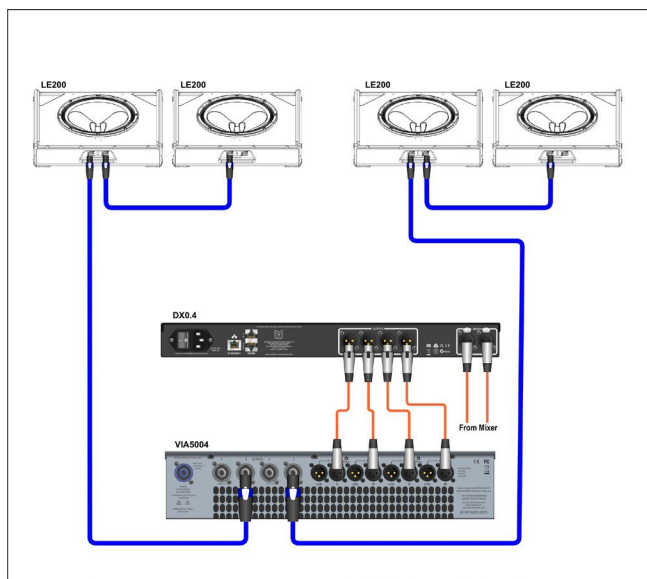


このシステムの特徴は、2つの12ボックスO-Lineアレイと1組のSX112サブウーファーです。このシステムは通常、講義室や会議室、小規模な礼拝堂などで、ボーカルの明瞭度と拡散性を優先する場合に使用されます。また、フルレンジのパフォーマンスが必要な録音済み音楽にも使用できます。ミキサーからの左右の入力は、DX0.4またはDX0.6の入力AとBに送られます。DX0.4またはDX0.6に供給します。出力は2つの独立したアンプに供給され、今回はそれぞれのアンプがMartin Audio VIA2502です。出力1と2はサブ出力で、サブ帯域にはステレオ情報がないため、これらのフィードはモノラルで設定できます。サブVIA2502の出力は、2台のサブウーファーSX112のNL4入力に供給されます。図では左右に配置されていますが、会場の下など適切な場所があれば、中央で隣り合わせに配置するのもよいでしょう。ステージの下など、会場に適切な場所があれば、中央で隣り合わせにするのもよいでしょう。サブウーファーを中央に配置することで、左右に配置した場合に避けられない「パワー・アレイ」を避けることができます。

DX0.4またはDX0.6の出力3と4は、2番目のVIA2502の入力にルーティングされます。このアンプからの出力はO-Lineアレイにルーティングされます。

この例では、SX112の出力プリセットを使用して出力1と2を設定することができます。O-Lineアレイのイコライザーを計算するには、Martin Audio **Display2.3** ソフトウェアを使用し、EQタブでPassive EQのオプションを選択する必要があります。DX0.4とDX0.6プロセッサでは、O-Lineアレイを完全に最適化することはできません。

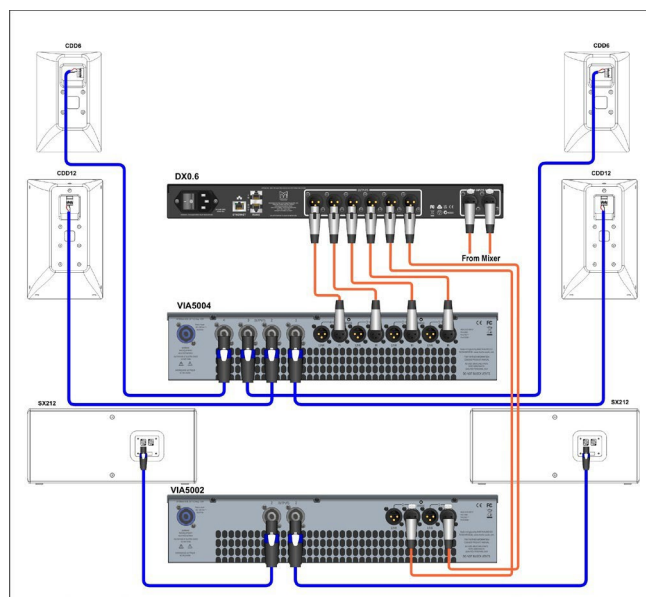
LE200 モニター 2 組



このシステムでは、DX0.4またはDX0.6を2チャンネル・クロスオーバーとして使用し、2ペアのLE200モニターをバイアンプで駆動します。これは、クラブや大きな会場で演奏するデュオで、限られた予算で良質なモニターを必要とする場合に適しています。LE200モニターはCDDドライバー・テクノロジーを採用し、軽量の薄型エンクロージャーで驚異的なステージ・カバレッジを実現します。バイアンプ方式を採用し、究極のコントロールで最高の音質を実現します。DX0.4またはDX0.6の入力はシステム・ミキサーから供給されます。このセットアップでは、モニター・フィードは通常、フロント・オブ・ハウス・ミキサーまたは専用のモニター・デスクからのプリフェードAUXセンドを使用します。このシステムは4チャンネルのMartin Audio VIA5004を使用しており、ラックススペース、重量、コストを節約しています。DX0.4またはDX0.6の出力1〜4はアンプの入力1〜4にルーティングされます。チャンネル1と2は、最初のペアモニターの低域と高域をドライブします。チャンネル3と4は2組目のモニターを駆動します。

4 台のモニターはすべて、入力コネクターパネルでバイアンプに切り替える必要があります。これにより、NL4コネクターのチャンネル1+/-の信号がドライバーの低域セクションに、チャンネル2+/-の信号がコンプレッションドライバーに送られます。スピーカーケーブルは4芯が必要です。4つのチャンネルの両端をNL4に配線する必要があります。アンプ出力のNL4は出力1と3に接続され、これらはピン1+/-のそのチャンネルの出力だけでなく、特にバイアンプ・スピーカーへの給電を容易にするため、ピン2+/-の次のチャンネルも伝送します。これにより、低域と高域の両方の信号が1本のケーブルで伝送されます。LE200のペアは、4芯の短いNL4リード線で結ばれています。図ではこれらのケーブルをメイン・コネクター・パネルに接続していますが、ハンドル・ポケットにある平行・コネクターで接続した方がすっきりするかもしれません。DX0.4またはDX0.6を設定するには、LE200のLFとHFの出力チャンネル・プリセットを適切なチャンネルにリコールします。

CDD12, CDD6 と SX212 subs



CDDシリーズの2機種、CDD12とCDD6にSX212サブウーファーを組み合わせた常設システムです。CDD12でメインエリアをカバーし、CDD6でセカンダリースペースをカバーするようなバーでの設置に適したシステムです。このシステムでは、DX0.6をシステム・プロセッサとして使用し、ミキサーなどの信号ソースからフィードを受け取ります。システムはステレオで動作し、DX0.6の出力1と2はサブウーファーに供給され、出力3と4はCDD12をコントロールします。CDD12をコントロールし、出力5と6はCDD6をコントロールします。

システムにはマーティン・オーディオのアンプを2台使用：

- ・ CDD12とCDD6スピーカーを駆動する4チャンネルアンプVIA5004を1台。
- ・ サブウーファーSX212を駆動する2チャンネルアンプVIA5002。

DX0.6と各アンプを6本の短いXLRケーブルで接続。

- ・ DX0.6の出力1と2はVIA5002の入力1と2へ。
- ・ DX0.6の出力3、4、5、6はVIA5004の入力1、2、3、4に接続されます、3および4に接続。

4本のNL4-ペアエンド・スピーカー・ケーブルは、VIA5004（出力1、2、3、4）とCDDスピーカー（フェニックス型コネクタ）を接続します。

2本の標準NL4スピーカー・ケーブルは、VIA5002（出力1および2）と2台のSX212サブウーファーを接続します。

- ・ 出力5、6にはTHV HF 出力プリセットが設定されています。

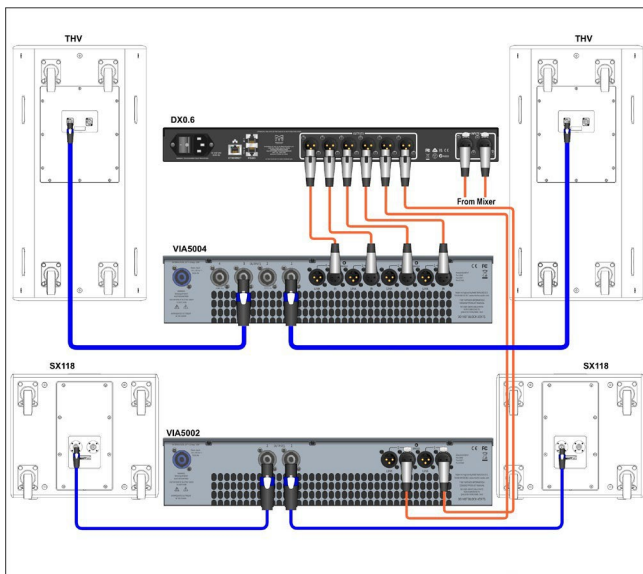
DX0.6入力Aは出力1、3、5にルーティングされます。DX0.6入力Bは出力2、4、6にルーティングされています。入力Aを出力2に、入力Bを出力1にルーティングすれば、サブウーファーをモノラルで使用することも可能です。短いXLRケーブルでDX0.6の出力をアンプの入力に接続します。

- ・ DX0.6の出力1と2はVIA5002の入力1と2に接続されています。
- ・ DX0.6出力3、4、5、6は、VIA5004入力1、2、3、4に接続します。

1、2、3、4に接続します。

さらに2本のNL4スピーカーケーブルで、VIA5004の出力とTHVの入力を接続します。これらのケーブルは4芯でなければならぬことに注意してください。1本は、チャンネル2がピン2+/-に配線されているチャンネル1出力に接続し、もう1本は、チャンネル4がピン2+/-に配線されているチャンネル3出力に接続します。これにより、LFとHFの両方の信号が1本のケーブルでスピーカーに供給されます。

THV と SX118 subs

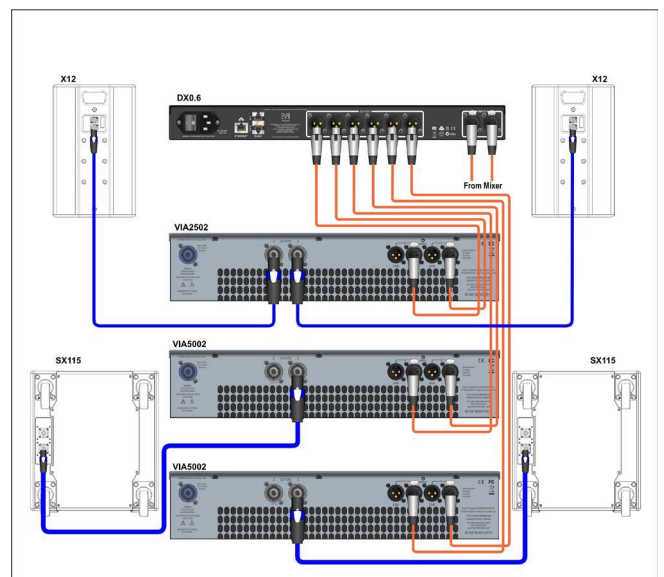


THV 3ウェイ・バイアンプ・スピーカーとSX118シングル18インチ・サブウーファーを搭載したポータブル・システムです。大きなクラブやバー、ライブハウスでギグを行うバンドやDJに理想的なシステムです。THVのホーン・ローディングは、サウンドをプロジェクションし、SPLを高め、分散をコントロールするのに役立ちます。

DX0.6はステレオ3ウェイクロスオーバーとして構成されています。

- ・ 出力1と2にはSX118 サブウーファー用の出力プリセットがプログラムされています。
- ・ 出力3と4にはTHVのLF出力プリセットが設定されています。

BlacklineX12 と SCX115 subs



BlacklineX12フルレンジスピーカーとSCX115カーディオイド15インチサブウーファーを組み合わせたポータブルシステムです。小規模なクラブやバー、ライブハウスでギグを行うバンドやDJに理想的なシステムです。このシステムにはツイン15インチに近い出力を持つ非常にコンパクトなサブウーファーという利点と、カーディオイド・ディスページョンという大きな利点があり、ステージ上でのサブ周波数のこぼれを最小限に抑えます。

これにより、ミュージシャンやDJにとってステージでの体験がはるかに良くなり、後方の壁からの反射の問題も解消されます。SXC115は2チャンネルのアンプを必要とします。リア・ドライバー用に1チャンネル、それぞれ独立したプロセッシングが必要です。このシステムにはDX0.6が使用されており、チャンネル1と2はフロント用と左サブ用のリア処理、チャンネル3と4は右サブ用、チャンネル5と6は左右のX12スピーカー用に必要な処理を行います。システムには3台のMartin Audioアンプが使用されています：

- ・ 2台のVIA5002アンプ（SXC115サブ用に各1台）。
- ・ VIA2502アンプ1台（X12スピーカーの両方に使用）。

短いXLRリード線でDX0.6とアンプを接続。出力1と2は最初のVIA5002の入力1と2へ。出力3と4は、2番目のVIA5002入力1と2に接続されています。2. 出力5および6は、VIA2502入力1および2に送られます。VIA5002アンプからの出力は、出力1に接続された4芯のNL4スピーカー・リードを使用します。これは、チャンネル1をピン1+/-に、チャンネル2をピン2+/-に接続し、2つの独立したチャンネルを1本のケーブルで各サブウーファーに供給します。

VIA2502アンプからの出力は、標準的なNL4スピーカーケーブルで、出力1を一方のX12に、出力2をもう一方のX12に接続します。DX0.6の出力チャンネルを設定するには、チャンネル1と3にSXC115フロント、チャンネル2と4にSXC115リア、出力チャンネル5と6にX12のプリセットを使用します。完全なステレオ動作の場合、入力Aを出力1、2、5に、入力Bを出力3、4、6にルーティングします。サブウーファーをモノラルに設定することもできます。この場合、入力チャンネルAを出力1、2、3、4、5に、入力Bを出力1、2、3、4、6に接続します。

トラブルシューティング

電源が入らない

- 電源コードがIECソケットにしっかりと固定され、ACコンセントに完全に差し込まれていることを確認してください。
- 背面パネルの電源スイッチ（9ページ）がオンになっていることを確認します。
- 建物や地域の照明を確認してください。停電している可能性があります。
- テスターやランプを使って、ACコンセントが生きていることを確認します。
- 電源ケーブルプラグのヒューズを確認します。
- 上記をすべて確認してもフロントパネルが点灯しない場合は、弊社製品サポートチームまでご連絡ください。詳しくはMartin Audioのウェブサイトをご覧ください。

ノイズやハム音

- ミキサーとプロセッサー、プロセッサーとアンプ、ラウドスピーカー間のシグナルケーブルをチェックします。一本ずつ外してみてください。
- ノイズが消えれば、どのインプットまたはアウトプットに問題があるかがわかります。すべてのオーディオ機器を同じAC回路に接続し、共通のグラウンドを共有するようにするとよいでしょう。

音が出ない

- ミキサーやアンプのレベルコントロールは、完全に下げられていますか？システムの接続（7ページ）の指示に従って、システムのすべてのボリュームコントロールが適切に調整されていることをご確認ください。
- シグナルソースは動作していますか？すべての接続ケーブルが良好な状態にあり、両端がしっかりと接続されていることをご確認ください。

片方の声が大きい

- ミキサー、アンプ、プロセッサーのレベルコントロールは、左右同じに設定されていますか？
- ゲインの設定は、プロセッサーの入出力の左右ペアすべてで同じですか？
- EQの設定は、プロセッサーの入出力の左右ペアすべてで同じですか？
- リミッターの設定は、プロセッサーのアウトプットの左右ペアすべてで同じですか？

- 信号ソースのパンコントロールをチェックしてください。片側に偏りすぎているかもしれません。ステレオ信号ソースを使用している場合、ステレオ信号のバランスが崩れている可能性があります。
- 次のように左右を入れ替えてみてください：
 1. アンプの電源を切ります。
 2. アンプのスピーカーケーブルを交換します。
 3. アンプの電源を入れ直します。
 同じ側の音量がまだ大きい場合、問題はスピーカーケーブルかラウドスピーカーにあります。ラウドネスが左右入れ替わった場合、ミキサー、アンプ、またはラインレベルの配線に問題があります。

音が悪い

- インプットとアウトプットのコネクタが、ソケットに完全に差し込まれていることを確認してください。
- 音が大きく歪んでいる場合、ミキサーやアンプ、プロセッサーの信号レベルを下げてください。
- 可能であれば、プリアンプ段にヘッドフォンを接続し、シグナルソースを聴いてみてください。この音が悪い場合、それはプロセッサーのせいではありません。
- ゲインやEQの設定が高すぎませんか？カットやブーストは控えめにすべきです。極端にカットとブーストを使う必要がある場合は、他の場所に問題があります。

技術仕様

一般	
入力インピーダンス	20k Ohm balanced
出力インピーダンス	100R
最大入力レベル	+20dBu
最大出力レベル	+18dBu
クロストーク	< -95dB
サンプリングレート	96kHz
信号対ノイズ比	> 113dB (A weighted)
ノイズフロア	< -94dB (A weighted)
同相信号除去比	60dB
周波数応答	20Hz to 40kHz +0.3dB
入力A/Dダイナミック・レンジ	118dB
出力D/Aダイナミック・レンジ	118dB
THD (+4dBu 1kHz)	< 0.003%
主電源電圧範囲	85-230VAC 50-60Hz
公称消費電力	30W

コネクタ	
音声入力	2 x 3 pin female XLR
音声出力	4 x 3 pin male XLR
イーサネット	Shielded RJ45, dynamic or static IP
RS485	2 x RG45
USB	1 x USB B (front panel)
メイン	3 pin IEC

プロセッシング	
信号発生器	White or pink noise, -30dBu to +10dBu
ゲイン	-18dB to +12dB, step accuracy 0.1dB
入力コライザー	10 band PEQ, gain range +15dB 14 x Filter types
入力ゲート	Threshold: -40 to -80dBu Attack: 1 to 1,000ms Release: 1 to 1,000ms
ルーティング	Freely assignable 2-in, 4-out Up to 30dB attenuation on each node
ディレイ	Input: 0 to 600ms Output: 0 to 200ms Steps: 20us Units: milliseconds, metres, feet

プロセッシング	
出力フィルター	High & Low Pass, -6dB/Octave to -48dB/Octave Slope types: Butterworth, Bessel, Linkwitz-Riley
出力イコライザー	8 band PEQ, gain +15dB 14 x filter types FIR Filter Import
プログラムリミッター	Threshold: -10 to +20dBu Attack: 1 to 1,000ms Release: 10 to 3,000ms
ピーク・リミッター	Threshold: 0 to 12dB above Program Limiter Threshold (max +20dBu) Release: Fast (91ms), Medium (350ms), Slow (800ms)

寸法	
高さ	1U (44mm) [1.75"]
幅	482mm [19"]
奥行き	230mm [9.1"]
重量	3.0kg [6.6lb]



www.martin-audio-japan.com

Martin Audio, Martin Audioのロゴ、および、英国、米国、およびその他の国におけるMartin Audio Ltd.の登録商標です。

輸入販売元：株式会社オーディオブレインズ
 神奈川県川崎市宮前区宮崎649-3
 Telephone : 044-888-6761